

障害福祉サービスにおけるダウン症者の集団参加スキルと支援ニーズ

— ASIST 適応スキルプロフィール-IDver. を用いた調査 —

西郷 俊介*・橋本 創一**・柘 千晶**・熊谷 亮***・中西 晴之****・脇田 一隆****・
丸山 徳晃****・春日井 宏彰*****・前川 涼*****

(2017年11月21日受理)

SAIGOU, S., HASHIMOTO, S., MASU, C., KUMAGAI, R., NAKANISHI, H., WAKITA, K., MARUYAMA, N., KASUGAI, H. and MAEKAWA, R.; Group Participation Skills and Support Needs of People with Down Syndrome in Disability Welfare Services: A Study Using ASIST Adaptive Skill Profile - IDver. ISSN 1349-9580

Based on the data of ASIST Adaptive Skill Profile - IDver. (41 persons diagnosed as Down Syndrome among 179 users of Disability Welfare Services), a study was conducted on group participation of adults with Down syndrome from both adaptation skills (from viewpoint of development support) and support needs (viewpoint of alleviating obstacles). About adaptive skills, the acquisition status of the “behavior control” area was relatively high, however, the “group participation skills” was not high at all, suggesting that adequate development support is necessary. In addition, it was suggested that the support needs of the areas related to collective participation such as “spontaneous words”, “hyperactivity / impulsivity”, “commitment”, “hypersensitivity of sensation” are remarkable.

KEY WORDS : Disability Welfare Service, Down Syndrome, Collective Participation Skill, Support Needs

* Social Welfare Corporation ASHINOIE FUKUSHIKAI

** Center for the Research and Support of Educational Practice, Tokyo Gakugei University

*** Fukuoka University of Education

**** Social Welfare Corporation SHIKOUKAI

***** Social Welfare Corporation KAZUEDA FUKUSHIKAI

1. 問題の所在と目的

近年、知的発達障害者の高齢化に伴う老化、疾患、退行²⁾⁴⁾などに関する問題が急増している。また、若年の成人期においても、日常生活および就労など様々な社会的場面で、獲得しているスキルの制限と障害による支援ニーズの影響の両面から、適応状況がうまくない者が少

なくない⁵⁾。

不適応は、学校であれば「学習の遅れ、不登校、行動上の問題」、職場であれば「無気力、引きこもり、無職（ニート）の問題」、家庭であれば「離婚、家庭内暴力（DV）、児童虐待の問題」などにつながることも考えられる。つまり、障害福祉サービス事業所（以下、事業所）においても同様に、利用者の集団参加をどのように

* 社会福祉法人 葦の家福祉会
** 東京学芸大学教育実践研究支援センター 教育臨床研究部門
*** 福岡教育大学
**** 社会福祉法人 試行会
***** 社会福祉法人 和枝福祉会

支援し保障していくかは重要な課題となる。

事業所を利用する成人期知的発達障害者（以下、利用者）の適応についてアセスメントする場合、WHOによるICF（国際生活機能分類）の「活動（個人活動）」と「参加（集団参加）」がうまくなされているかどうかを評価することになる。また、その評価は「事業所における作業・活動（個人活動）」や「事業所における他者との関わり（集団参加）」等の支援内容・方法について検討することにつながる。

そこで本研究は、ASIST適応スキルプロフィール-IDver.¹⁾ から得たデータをもとに、利用者の適応スキルと支援ニーズについて検討することを目的とした。本稿においては、特にダウン症のある利用者の集団参加に関わる適応スキルと支援ニーズについて検討した。

2. 方法

2.1 測定領域

ASIST適応スキルプロフィール-IDver.は、本人が身につけている「適応スキル」と、障害特性および心理行動上の問題による「支援ニーズ」の2側面をそれぞれ把握するために開発されたアセスメントツールである（図1-1、1-2）。「適応スキル（A尺度）の5領域100項目」と「特別な支援ニーズ（B尺度）の10領域50項目」によって、「発達支援（プラス志向）」と「障害軽減（マイナス志向）」という2つの視点から、発達状況や適応状態を把握（到達年齢AG、到達指数AQを算出）できる。さらに、ICFにならった「個人活動」と「集団参加」という2軸で、適応スキルや特別な支援ニーズを整理し評価できる。

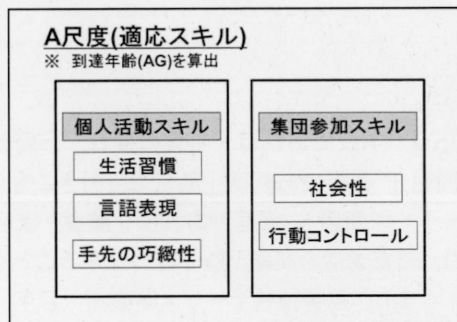


図1-1 A尺度（適応スキル）

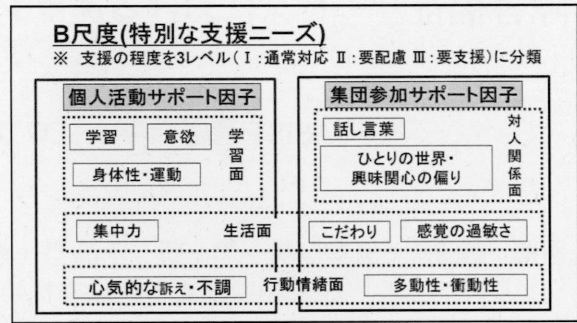


図1-2 B尺度（特別な支援ニーズ）

2.2 対象と調査手続き

A市にある生活介護事業5ヶ所の職員にASIST適応スキルプロフィール-IDver.を配布し、マニュアルにしたがって利用者の様子について回答を求めた。本研究では、診断名、性別、年齢、療育手帳が明記されていた利用者179名のうち、ダウン症と診断されている41名（男性27名、女性14名／20代7名、30代15名、40代16名、50代3名／A1最重度：15名、A2重度：23名、B1中度：3名）を分析対象とした（表1）。

2.3 分析方法

A尺度については、5つの各領域の到達年齢を算出した。B尺度については、10の各領域の支援の程度を3レベル（Ⅰ.通常対応、Ⅱ.要配慮、Ⅲ.要支援）に分類した。なお、本研究の調査協力及び発表について了解を得た上で、個人情報には十分に留意し、倫理的配慮を行った。

表1 対象

	最重度 (A1)	重度 (A2)	中度 (B1)	軽度 (B2)
精神遅滞	11名	23名	19名	5名
自閉症	33名	25名	7名	3名
ダウン症	15名	23名	3名	0名
その他	7名	4名	1名	0名

3. 結果と考察

まず、A尺度について、障害種ごとの各領域の平均到達年齢を図2に示した。精神遅滞とダウン症は、生活習慣と行動コントロールが高く、言語表現と社会性、手先の巧緻性が低いという類似したプロフィール型であった。一方、自閉症は、手先の巧緻性が高く、社会性と言語表現が著しく低いプロフィール型だった。いずれも従来から指摘される障害特性の影響が示されたものと考えられる。

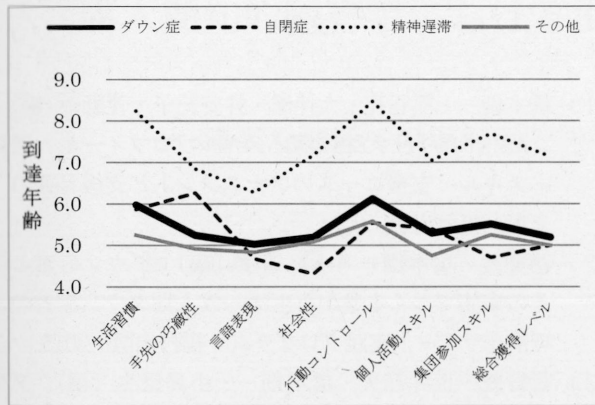


図2 A尺度各領域の平均到達年齢 (障害種ごと)

ダウン症の各領域における平均到達年齢 (AG) は、「A5.行動コントロール (6.1歳)」「A1.生活習慣 (6.0歳)」が高く、「A2.手先の巧緻性 (5.2歳)」「A4.社会性 (5.2歳)」「A3.言語表現 (5.0歳)」が低かった。様々な障害のある利用者を抱える事業所において、行動コントロールのスキルが比較的高い利用者には集団参加に関わる支援が展開されることが少ない可能性も考えられる。しかし、ダウン症のある利用者の「集団参加スキル (5.5歳) ※A4.+A5.」到達年齢の割合をみると、4歳以下レベル19名 (46%)、5歳レベル12名 (29%) で全体の7割以上を占めており、そのスキルは決して高いものではなく、適切な発達支援が必要であることが示唆される (図3)。

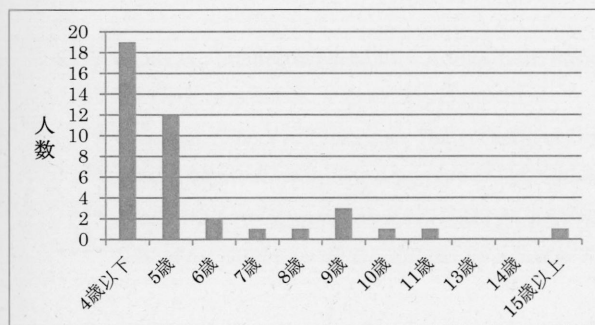
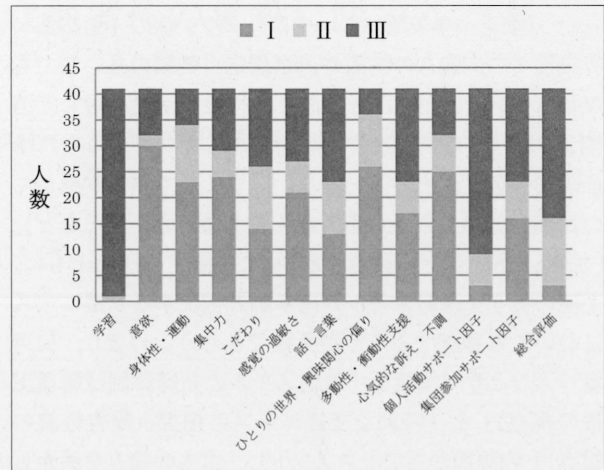


図3 集団参加スキル到達年齢の割合 (ダウン症)

次に、B尺度について、ダウン症における各領域の支援レベルの割合を図4に示した。「集団参加サポート因子 ※B5.+B6.+B7.+B8.+B9.」をみると、I (通常対応) が16名 (39%)、III (要支援) が18名 (44%) でIとIIIに分かれていた。さらに、各領域においてIII (要支援) と評価された者を見ると、「B7.話し言葉」「B9.多動性・衝動性」(18名: 44%)、「B5.こだわり」(15名: 37%)、「B6.感覚の過敏さ」(14名: 34%) といった集団参加に関わる領域の割合が高く、それらの支援ニーズが



※I: 通常対応レベル, II: 要配慮レベル, III: 要支援レベル
図4 B尺度各領域における支援レベルの割合 (ダウン症)

つまり、ダウン症のある利用者の集団参加をサポートするにあたっては、特に「話し言葉」→対人関係面、「多動性・衝動性」→行動情緒面、「こだわり」「感覚の過敏さ」→生活面といった側面への適切なアプローチを検討することが大切であると考えられる。具体的な支援目標例を表2に示した。

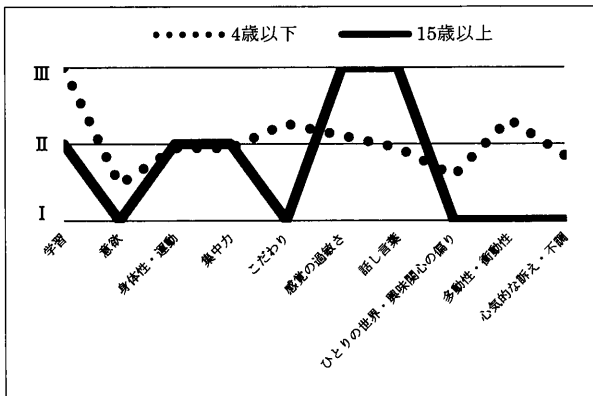
表2 各ニーズ側面への支援目標例

ニーズ側面	支援目標
対人関係面 (話し言葉)	話すことが苦痛とならないように ゆっくり落ち着いて話せる環境を作る。
	模倣させ、練習を重ねて適切な場面で言えるようにする。
	自分で話せなくても、信頼できる人に代弁してもらいながら人の前に立つ機会を設ける。
行動情緒面 (多動性/衝動性)	本人にわかりやすく具体的な約束をし、落ち着いて活動に取り組める時間や待つことのできる時間を徐々に伸ばす。
	場面転換をして気持ちを切り替える。
生活面 (こだわり) (感覚の過敏さ)	本人が安心できる人や物と一緒に集団参加できるようにする。
	予定を前もって知らせ、心の準備をさせ集団参加できるようにする。

4. おわりに

A尺度において集団参加スキルの到達年齢が15歳以上レベルだったにもかかわらず、B尺度「感覚の過敏さ」「話し言葉」においてIII (要支援) であるケースがみら

れた(図5)。事業所においては、ダウン症の「情緒面・行動面での内向きの特徴や過剰適応(笑顔の多い者でも実はストレスに弱く新奇場面や不得意な活動に対して消極さを示す、時間や物や人に対してこだわりがみられ場面の切り替えが上手くいかない、まじめで頑張り屋さんの反面自分の力以上に取り組んでしまったりするなど)」「加齢に伴う変化(退行など)」に配慮する³⁾とともに、上記のような適応スキル到達年齢と相反する支援ニーズについても考慮することが必要であろう。つまり、利用者一人ひとりの状態を「適応スキルの発達評価(発達支援の視点)」と「特別な支援ニーズの把握(障害軽減の視点)」の両面からアセスメントし、本人の強みを活かしながら、支援の必要な側面を見極め適切にサポートすることが重要であると考ええる。



※ I：通常対応レベル，II：要配慮レベル，III：要支援レベル

図5 集団参加スキルの到達年齢と支援レベルの比較

文献

- 1) 橋本創一・熊谷亮・大伴潔・林安紀子・菅野敦(編)：ASIST-ID ver. ASIST 適応スキルプロフィール 適応スキル・支援ニーズのアセスメントと支援目標の立案，福村出版，2014.
- 2) 菅野敦・橋本創一・小島道生(編)：ダウン症者とその家族でつくる豊かな生活—成人期ダウン症者の理解とサポート実践プログラム—福村出版，2015.
- 3) 菅野敦・玉井邦夫・橋本創一・小島道生(編)：ダウン症ハンドブック改訂版—家庭や学校・施設で取り組む療育・教育・支援プログラム—，日本文化科学社，2013.
- 4) 西郷俊介・橋本創一・三浦巧也：障害福祉サービスにおける成人期知的・発達障害者の支援ニーズに対する支援内容・方法に関する研究—TRUSTIAを用いた分析をもとに—，発達障害研究，36(1)，65-76，2014.
- 5) 横田圭司・千田若菜・岡田智：発達障害における精神科的な問題—境界知能から最重度知的障害の91ケースを通して—日本文化科学社，2011.